

# The Akita University Post

AUPブログ、  
好評配信中。



AUP  
AKITA UNIV. PRESS

Thursday, February 18, 2010 第12号



発行 AUP 秋田大学報道局

主筆 三宅朝子

編集デスク 田代周祐



kulo → shilo

① → ②



秋田大学宇宙開発プロジェクト

## 宇宙を夢見る若き技術者たち

工学資源学部3号館の少し奥に「ものづくり創造工学センター」と呼ばれる施設がある。そこで日夜、ロケットを作る学生たちがいる。彼らが秋田大学宇宙プロジェクト（Akita University Student Space Project）だ。今回は今ひそかに盛り上がりを見せる旬の団体ASSP取材してみた。

### ◆全国有数のロケット開発

彼らがハイブリッドロケットを作り始めたのは、今から

4年前にさかのぼる。きっかけは、その1年前、機械工学科の大学院生による缶サットの打ち上げプロジェクトで、当時プロジェクトに参加していた学生が改めて宇宙への夢を掲げ結成したのがASSPである。ASSPを結成した当時、まだ学生によるハイブ

リッドロケットの打ち上げなどが盛んな時期でなく、このような活動を自主的に行う大学は全国でも数える程しかなかった。またそういう状況にあつて、当時のメンバーはおよそ3分の1が女性だったというのもまた驚きである。

### ◆一発入魂

現在のASSPのメンバーは20名程度で主に機体を開発する人、エンジンの燃焼試験を行う人、また電子回路の設計をする人など様々な役割を持った人たちが、それぞれ一括りになった班を作って活動している。その活動の仕方は、かなり組織的なもので、一台のロケットを作るのにこれだけの役割分担を行って、設計、開発の時間を合わせて一週間程度費やす。ASSPでは、これを年に3回、ロケットの数にして4、5台作っているという。費用は5万円程度。しかしこれだけ苦労して作ったロケットも一度飛ばしてしまつた後は、海に落下させてしまうため、回収ができない。

### ◆失敗めげずに宇宙目指す

実際に作ったロケットを打ち上げるため、広大な敷地を求め能代市へ向かった。現場で燃焼試験などに携わっていたスタッフは朝5時から準備していた。しかしながら朝から雨風が強くなり、最終的にその日は打ち上げができなかった。こういったことは珍しくない。しかし彼らのチームワークや、ロケットを飛ばしたいという情熱、そしてそれを自分たちの手ですべてこなす自主性は、本当に今の学生が見習わなければならない点なのではないだろうか。そんな彼らの夢は「ハイブリッドロケットを宇宙まで飛ばす」こと。人生のうちで自分のやりたいことに熱中することが出来る最後のチャンスであろう大学生活の夢に向かって大学生活を謳歌する姿がそこにはあつた。

(工藤 翔吾)

### 學貴日新

▼いい物書きになる条件とは何か。それはどれだけ多くのものを見てきたか、どれだけ新しい人に出会ったか、そしてどれだけ回り道をしてきたか。私はそう勝手に信じている。それは芸術家や作曲家など、表現者に一樣に言えることかもしれないが▼小学生の時初めてちよつとした冒険をした。駅から歩いて15分程度の祖母の家へ行くことがあり、ふと幼心にいつもと違う道を歩いてみようと思いついた。普段は決して曲がることのない角を曲がり、通りに入つた行き止まりや坂道ばかりで一向に前に進まない。けれどもそこには見たこともない景色がたくさんあつた▼感覚だけを頼りに歩くと、見慣れた光景があつて、家の前で祖母が心配そうに立っていた。駅を出て1時間半が経過していた。「なんかいい顔してる」と祖母が笑ってくれた▼受験に失敗し、行くあてのなかった私にとって何の縁もない秋田に来ることは、人生の道を大きく外れたことだと思つていた。少なくとも4年前までは。次の春をここで迎えられることがこんなに苦しいことなんて、当時は考えもしなかった▼この土地は私を大きく成長させてくれた。回り道をしたぶんだけ人は多くを学ぶ。そのことを秋田が教えてくれた▼私は書くことで自分を表現することが一番好きだ。物書きになりたいと思つている。だから、これからも回り道をするために、今はきつと秋田を離れなければならない▼今号をもって主筆を引退し、後輩に全てを託す。この活動をしていなければ出会わなかつたであろう人があまりに私には多すぎて、感謝の言葉もない。世代が変われば色も変わる。来年度からのAUPもどうぞ温かく見守つて頂きたい。

「AUP × 秋田大学附属図書館館長  
より身近な図書館へ  
もつと学生の声を」  
インタビュー

LED式蛍光灯付き閲覧機の設置、ソーラーパネルによる太陽光発電導入によるエネルギー削減。加えて本年には大規模な改修が予定されており、今秋田大学附属図書館は生まれ変わりの年を迎えている。それに即し図書館長である大好直教授にお話を伺った。(聞き手・編集 茂木 健介)

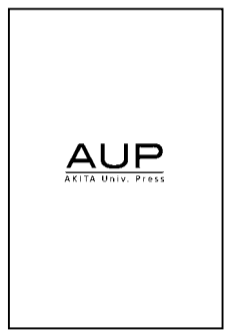
「なぜLED式蛍光灯付き閲覧機設置、太陽光発電の導入を？」

LED式蛍光灯付き閲覧機は、学内予算で平成20年、21年度に一階、二階の閲覧室にそれぞれ70席の計百四十席を設置しました。LEDは通常の蛍光灯に比べ非常に省エネルギーで、

CO2の削減に非常に効果的であると言われていたのですが、このような導入は全国の大学附属図書館でもまだあまりない試みです。

また太陽光発電、つまりソーラーパネルが完了したのは去年の12月ですが、こうした省エネルギー及びエコ対策へ向けた動きは特別図書館だけが行う、という

訳ではありません。あくまで今回の試みは、大学全体への導入のきっかけのようなものと考えてください。



新刊図書の書評を通し、学生との対話を図る。(=秋田大学附属図書館にて)

「何故最初の導入が図書館なのでか。」

一言で済ませるならば「学生が多く集まるから」でしょう。多くの学生の目に触れる事で、エコロジーを身近に感じて欲しい。一階の液晶パネルにて発電の状況を表示していますが、そのような思いがあつての事です。

「改修後のプランをお聞かせください」

今回の改修は、基礎の部分に「ラーニングコモンズ(知の公共化)」という考え方があり、図書館を単なる勉強や本の置き場ではなく「知の共有空間」としたいと思つていきます。詳しくここでお話することは出来ませんが、これからは今まで以上に交流スペースやグループ学習等のスペースを設けていく予定です。より「学生の流れ」が生まれ易い、身近で開かれた空間を目指しての事です。

「秋大生に向けて」

図書館という場所に対しては「厳粛」だとか「自習の場所」といったような「静」のイメージが強くあるかもしれません。しかし決して「図書館の役割」とは決まったものではなく、もつとフランクに、身近なものとして考えて下さい。例えば交流スペースの導入は、まさにイメージには反する「動的」な知の取り組みの導入ですし、何をやるか、出来るかは自由です。身構えずに、とりあえず図書館に足を運んでくれれば、施設の新しい使い方や要望が、自ずと見えてくるはず。そうして皆さんの声を聞かせて欲しいのです。



大好直  
OHYOSHI Tadashi

1945年4月30日生  
秋田大学附属図書館 館長  
工学資源学部  
機械工学科 教授

秋田大学附属図書館  
http://www.lib.akita-u.ac.jp/

であり、誰でも簡単に投書する事が可能だ。また、インターネットからも24時間要望を受け付けている。

大学図書館を主として利用するのには、よりよい運営には当然に学生の声が必要となつてくる。改修を控えたこの機会に、改めて図書館を訪れてみる。施設や資料についてのトボククは一階に設置してあり、誰でも簡単に投書する事が可能だ。また、インターネットからも24時間要望を受け付けている。



導入されたばかりの反射式天体望遠鏡「ミルエル」(=教育文化学部3号館)

大学で楽しむ

天然プラネタリウム

秋田大学に天文台があるのをご存知だろうか。教育文化学部3号館に設置されている天文台は、学内での教育・研究に使用されるほか、学外利用者への開放も行っている。我々の生活とはなかなか結びつかず、敷居が高いと感じてしまいう天文台観測。実際に秋田大学でどのように行われているのかを探る。

が行われることが無くなり、現在、天文台を使用する授業は一般教養科目である『天体観測入門』を含む2講義となつている。学内での研究に使用できないという現状から、市民向けの講座を3年前から行うこととなった。天文台の利用は学外にも開放されており、現在毛利氏が中心となり講座が毎月開催されている。主に天体に関心のある市民が友達を連れて講座に参加する様子が多く見られる。また、出張講座を行うなど、学外への活動も熱心に行われている。

という課題も抱える。「天文台の利用は、気軽にできるのでもっと活用してもらいたい。天体観測をしたいが、どうすればできるのか分からない学生は課外活動などを通して利用してもらいたい。」と毛利氏は語る。市民向けの講座は、毎月第4土曜日に開催されている。また、観測を希望する場合は毛利氏が所属する教育文化3号館313号室を訪ねると最大限、要望に応えてくれる様である。仲間を連れて冬の空の天体観測を共にしてみたいか。

(田代 周祐)

設置されたのは、昭和47年。しかしながら、現在は学生実験や卒業論文に使用されるものの、天文台について研究を行っていた教員が5年前に退職し、現在天文の研究を行う教員がいない。そのため、天文台の管理等は技術専門職員である毛利春治氏が行っているが、研究

氏が中心となり講座が毎月開催されている。主に天体に関心のある市民が友達を連れて講座に参加する様子が多く見られる。また、出張講座を行うなど、学外への活動も熱心に行われている。

その一方で、やはり学内での盛り上がり欠けると

# 新たな秋田の特産品に。

## 秋大生がきりたんぼを再考

「きりたんぼROLL」と題して秋田元気プロジェクトの一環で行われたこの活動は、教育文化学部学校教育課程3年次の7名の有志が集い、普段当たり前に食べられている秋田の特産品であるきりたんぼに着目し、新たな秋田の食の名産を考案しようと企画された。将来教師を目指す彼女たちが軸にしていたテーマ、それは「地域と関わりながら秋田を元気にすること」だった。

### ◆レストランとのコラボレーション

彼女たちが名づけた「きりたんぼROLL」とは、市販されているきりたんぼを電子レンジで温め、縦に切り込みを入れる。その中に具材などを工夫して詰め、おかずやデザートとして、新たなきりたんぼの食べ方を学生独自の目線でアレンジした料理である。秋田県庁の職員や市内の高校生などに協力してもらい収集した約600のレシピ案の中から数個に絞り、試作の5つのきりたんぼROLLを県民に実際に試食、評価してもらった。最終的に1位に輝いたきりたんぼROLL「比内地どりりたまロール」は田沢湖のレストラン「ORAE(オーラエ)」さんで商品として提供してもらったことも決まっている。

### ◆予想以上の大反響

試食会ではきりたんぼ200本分、5種類800食のきりたんぼROLLが



試食には多くの人々が列を作った(=秋田市ぽぽろーどにて)

### ◆多くの人に食べてもらいたい

現状では、1位に輝いた「比内地どりりたまロール」

秋田市ぽぽろーどで配られ、多くの人々が足を止め、評価に協力してくれた。調理の手間がかかるため、1つのトレーを出せば、一気になくなってしまう程であったが、「別の味も食べてみたい」と、長時間待つてくれた人もいるほどの人気ぶりだった。「学生が秋田のことを考えてくれてうれしい」と、試食をしていた女性に励ましの声をかけられた。「自分たちの行動が思っていた以上に影響が大きかったのでびっくりした」とメンバーの一人である畠山水明さんは話す。

「ル」は田沢湖のレストランでしか食べることができない。有志のメンバーは秋田大学学食や県内の物産館などでの商品化も希望している。「県内の人でさえ、鍋やみそたんぼなどの食べ方しかしていないと思う。きりたんぼの新たな可能性の大きさに気づいた。自宅などでも簡単に作れるので、私たちが思いつかなかったようなレシピを考案し、新しい家庭の味を作って家族の団欒に一役買えればうれしい」

企画の段階では、単なる思い出作りとして始めた。しかし、仲間との絆や学校や企業との協力、そして何より現場の生の声を聞き、「一つのことをするのに、たくさんさんの時間と人が関わっている」ということを学ん

## 秋田元気プロジェクトとは。

この企画は、上限20万円を支給し、秋田大学が学生の活動に対して積極的にサポートしてくれるものである。今年度のプロジェクトには9つもの団体が応募し現在活動を進めており、国際交流やボランティア活動など、分野も様々だ。

## 湯のみにハンゲル?

完成品を心待ちにし、談笑する留学生(=大仙市・陶芸の里交流施設にて)



日韓交流を目的とした「コリアサークル」が留学生に日本の伝統を知ってもらおうと秋田元気プロジェクトの一環として1月15日、大仙市協和にて陶芸体験を開催した。

陶芸体験はサークルの代表菅野里美さん(教育文化学部3年)が「留学生にも日本人にも普段はできないような特別な体験をしてもらいたい」という熱意から実現。「交流を通じて、日本の文化への理解を深めてほしい」と道の駅協和の「遺跡・陶芸の里、荒川焼陶芸教室」を選んだ。

荒川焼は、協和の地で採れた土を使用。成型後、乾燥させ十日間ほど窯で焼き続ける。そして最後に仕上げとなることが多い。現キャプテン中村堅人さん(工学資源学部2年)は「来季はさらに厳しい戦いがあると思うが、なんとしても一部に残りたい」と語る。「今のチームは一人一人の個性が光っている。今後は、一部リーグという新たな舞台で、どんな活躍を見せてくれるのか、期待したい。」

(菅原 成美)

韓国留学生をはじめ、秋田大学には沢山の留学生がいる。留学期間が短いだけに、日本の良さ、秋田の良さをより多く体感し、たくさんの方の思い出をつくらせたい。

(小坂 麻理)

### 秋大蹴球部

## 悲願の一部リーグ昇格

比内地どりりたまロール

昨年、秋田大学サッカー部の東北地区大学サッカーリーグ一部昇格が決まった。前年、最終戦で惜しくも逃した一部リーグ昇格は、部員たちにとって悲願であり目標だった。

サッカー部は週5回、4時30分から7時30分まで夏期はグラウンドで、冬期は体育館で練習している。選手とマネージャーを合わせた総勢32名。OBがコーチを務めるなど卒業生とのつながりも強い伝統ある部だ。そんな彼らにとって東北地区大学リーグ一部昇格は長年の目標だった。特に前年の惜敗による悔しさもあり、勝ちに対する執念は並々ならぬものがあった。

今季一部リーグをかけた最終戦、相手は近隣大学であるノースアジア大学。「顔見知りのチームだけに、負けたくなかった」と語るのは昨年キャプテンを務めた松本大輝さん(工学資源学部3年)。「2年連続チームの得点王であり部員からの信頼も厚い彼は、「普段は明るく楽しいチームだが、大会では勝ちにこだわるメンバーが揃っている」とチームを評す。結果は8対0。秋大の圧勝だった。そして彼らは長年の目標、一部リーグへの昇格を果たしたのだ。

毎年、一部に昇格したチームが次のシーズン二部に降

格となることが多い。現キャプテン中村堅人さん(工学資源学部2年)は「来季はさらに厳しい戦いがあると思うが、なんとしても一部に残りたい」と語る。「今のチームは一人一人の個性が光っている。今後は、一部リーグという新たな舞台で、どんな活躍を見せてくれるのか、期待したい。」

(菅原 成美)

現在のチームだけでなくサッカー部の歴史全体で嬉しいう結果だ、と語るサッカー部の面々。今新たな目標に向かい、ボ



勝利に沸く部員たち(=スポパークかわべにて)

AUP AKITA UNIV. PRESS

### AUP Photo Library.



今日の始まり 工学資源学部3号館にて (報道班 佐藤禎晃)

## AUP INFORMATION

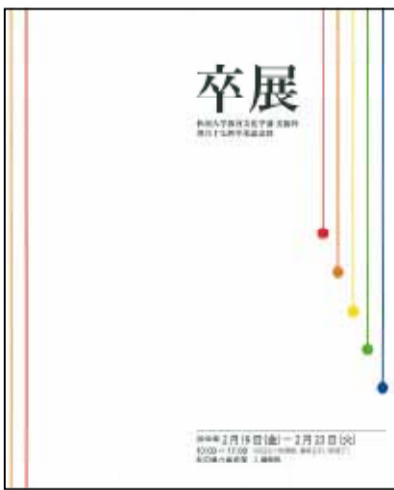
### 第57回 秋田大学教育文化学部美術科 卒業記念展

日々の研究・制作活動を活性化し、より充実、発展していくために、本展覧会では、卒業生だけでなく在学学生も一緒に発表することしております。また美術科担当教員による賛助作品も展示しておりますので、ぜひ県立美術館にご来場ください。

**【日時】**  
2010年2月19日(金) - 2月23日(火)  
10:00~17:00  
(初日12:00開始、最終日15:00終了)

**【場所】**  
秋田県立美術館 **入場無料**

**【問い合わせ先】**  
教育文化学部 総務担当  
電話:018-889-2509  
FAX:018-833-3049



## 元木 崇 さん

もとき たかし / 高校卒業後日本ジャーナリスト専門学校に入学。専門学校在籍中にライターでアルバイトし、全国各地を取材する。その後雑誌記者として勤務。31歳の時に秋田に戻りビル管理を務め、2003年5月に37歳で現在のシアタープレイタウンの経営にあたる。

「寒いとこ悪いねえ。まだ一服してないんだあ。」と言いながら先日転んで痛めたというお尻をかばってそつと腰を掛けた。映画という華やかなイメージとはちよつと違う控えめで謙虚な店主さんが今回の語り手、元木崇さん。有楽町にひっそりとたたずむ映画館、シアタープレイタウンの経営を引き継いで7年目になる。実はシアタープレイタウンには戦争や人種差別問題などの題材を取り上げられていることが多い。ここには元木さんの「まだ世界には自分の知らないことがたくさんあることを知ってほしい。」という想いがこめられている。娯楽では収まらない彼の映画セレクトに今後注目していきたい。

# 秋田百聞

6

## 映画館じゃない映画館。

「秋田百聞」は、秋田に縁の深い人々にお話を伺い、秋大生や秋田について考えて頂く企画です。



「学生に特に見て欲しいんだけどね。あまり来ないねえ。」と寂しそうに肩を落とした。映画を通して社会情勢の本質に気づいても、年齢を重ねるとフットワークが鈍くなりがちで、行動するにも限界がある。吸収力や原動力も、若者には及ばないと元木さんは感じている。一番見て欲しい年代層が薄いのは残念だ。

歴史が刻まれている映画館(=秋田市有楽町)元木さんは友人に「元木さんの映画館は映画館じゃないみたいだね。」といわれた事があると嬉しそうに話した。流行にこだわるこ

「彼女の夢は通訳になることだったなあ。今頃どうしてるかな。」元木さんには映画館を始めて、心に残る高校生の女の子がいた。高校生には珍しくシアタープレイタウンによく通っていたのだ。顔なじみになってしまっただけ経った頃、彼女は「通訳士になりたい」と話してくれた。高校3年の受験期になるとぼったり姿をみせなくなってしまうが、今でも印象深い出来事だという。きつと元木さんが選んだ作品をみて将来通訳士として働く自分を思い描いていたに違いない。彼女が夢を叶える日が来る事を、元木さんは今も心の中から声援を送っている。

ともなく、話題性のある作品に飛びつくわけでもない。ただ皆に知ってほしい世界を題材にした作品を上映する元木さんのポリシーに気づいたのだろう。

この映画館をたたくさんの人が訪れては去って行った。ある人は美しい異国の景色に魅了され、ある人は役者に恋をして、ある人は夢を持ちまだ見ぬ世界を想像した。店主が変わり映画の色も変わった。娯楽だけでは新しい世界を知る手段としての映画の価値を元木さんは教えてくれた。将来に迷う学生にこそ必要なシアタープレイタウンに今後足を運ぶ機会が増えることを期待する。(聞き手・鎌田 美咲)

「今使っている古い映写機が直せなくなったら閉めようと思う。」とぼつりとつぶやいた。現在利益の出ていない状態で高価な映写機の購入は難しい。「そこまでして続けるつもりはないよ。」と坦々と話した。

意外にも今回初めて、後輩へ編集作業を教える機会を設けた。それにあたり、記事の配置や見出しなどをとことん話し合い、やっと新聞部らしくなってきたところで卒業だ。後輩たちも瞳を輝かせて作業にあたりてくれた。よく本学職員の方々やAUPを支援してくださる方々に、「ちゃんと後輩は続いているのか。」

### 編集後記

と、指摘を受ける。ご安心を。小紙の編集作業を含め、これまで多くのイベント開催のための準備には、仲間の後輩たちに助力してもらった。次期主筆の方がよっぽど私より主筆らしい。わがままでこんなに頼りない私に最後までついてきてくれて本当にありがとう。長い歴史の1ページを仲間とともに刻んでください。(2代目主筆・三宅朝子)



4th March 2010 coming soon...